

皆様、春季大祭、そして、豊穰祈願祭おめでとうございます。

誠に畏れ多いことではありますが、私どもの魂の親は、永遠の命である唯一の神・主神であります。

私どもの父母先祖の方々の魂の親も、これから世に生まれてくる子供たちの魂の親も、主神であります。

私どもは、自分の命には限りがあると思っておりますが、私どもは、そして、私どもと一体である天地万物一切は、主神の永遠の命に満たされて、生きたものとされております。

明主様は、ご昇天の前年の昭和29（1954）年4月、脳溢血の症状を起こして倒れられましたが、このことを「御神業として非常に神秘的な事」と仰せになり、その後、ご自身の中で「メシヤが生まれた」ことを「新しく生まれる」というお言葉をもってご発表になりました。

そして、その年の6月15日、「メシヤ降誕仮祝典」を挙行され、筆舌に尽くしがたいご自身の喜びを私どもにも分け与えてくださいました。

「新しく生まれる」とは、自らのうちに「メシアが生まれる」ことであり、それは、主神の子として「新しく生きるものとなる、ことであると思います。

明主様は、ご自身が人間の両親からの限りある命を受け継いでいるだけではなく、その命の中心には、主神の永遠の命が存在していることを確信し、そのことを主神に意思表示されました。

そして、主神の大いなる赦しの中、明主様は主神の子として新しく生きるものとなられ、その翌年、今から60年前の昭和30（1955）年2月10日、ご昇天を迎えられました。

明主様は、ご自身が主神の子として新しく生まれたという、その「事実」を、当時、「たいへんな事件なんです」と仰せになりましたが、私どもにとって、この明主様のご心境を、目に見える形として、あるいは、感覚として捉えることは、大変難しいことであると思います。

しかしながら、私どもは、目に見えないもの、感じ取ることのできないものを信じる心を養っていただいている立場なのではないでしょうか。

ですから、私どもは、この神秘を人間の知恵や理屈で理解しようとするのではなく、明主様がお歌に「理屈もて説けぬ神秘を明らかにするこそ真まことの教なるらむ」とお詠みになりましたように、この「新しく生まれる」ことを、素直に自らの心の中心にお受けする必要があると思います。

そして、私どもは、明主様を模範とさせていただき、たとえ、主神のお姿を拝することができなくても、また、そのお声を聞くことができなくても、自分は、はじめから明主様とひとつに結ばれたものとして、主神の子となることが定められていたことを思い出し、主神に対し、“わたしはあなたの子供です、と意思表示し、新しく生きるものとならせていただく務めがあるのではないのでしょうか。

①之光教団の皆様には、夜昼転換した新しい養いの中で、明主様に結ばれたものとして、自らの中心に存在する天国に立ち返らせていただき、すべては主神のみ業として委ねさせていただくという、全く新しい実践を、成井理事長を中心に、率先して取り組んでおられますことを、大変ありがたく思っております。

先程は、皆様を代表して、〇〇さんが感謝奉告をご発表になりましたが、お話をお伺いする中で思わせていただいたことは、私どもの中心には常に天国が存在しているということです。

そして、すべてのものを赦し、救うという天国の営みにお使いいただいているからこそ、私どもは、良くも悪くも、あらゆる境遇に導かれ、また、あらゆる心境に誘われているということでもあります。

また、私は、今年1月、高知布教区信徒大会に出席いたしました。信徒の皆様と直接お目にかかる中で、皆様が、明主様を模範として、主神に進んで心を向け、交流することに努めておられるお姿に触れさせていただき、深い感銘を覚えました。

皆様の中に生まれた、この新しい営みがさらに一層充実し、私も皆様と共に主神にお仕えするものとして、皆様と共に一段とステップアップさせていただけますよう願っております。

さて、冒頭に申し上げましたように、私どもの魂の親は主神であります。

私どもは、その主神を親として生まれた子供なのです。

明主様と共にあるメシアの御名に結ばれて生まれた子供です。

私どもが今、魂の親を知ることができたこと、このことは、何にも代えがたい主神の赦しであり、救いであると思います。

私どもは、この世の親は知っていても、魂の親を知ることなく生きてまいりました。

そうした私どもは、明主様に導かれて、魂の親を思い出させていただきました。

私どもは、もはや、行く道にまどうものではなく、立ち返るべきところを知るものとならせていただきました。

それは、主神が大きな愛をもって夜昼転換を成し遂げられ、私どもを赦してくださり、救ってくださったからです。

この赦しと救いがあればこそ、私どもは、主神に対して、人間の親に対するように、呼びかけることができるのではないのでしょうか。

そして、主神と言葉を交わし、思いを通わせていただくことができるのではないのでしょうか。

私どもは、今まで、主神と交流させていただけるとは思ってもいませんでしたし、交流することなど考えもしませんでした。

私どもにとって、自らの思いをご奉告させていただける方、意思表示させていただける方、委ねさせていただける方を知ったということ、このことこそ、主神の大いなる愛による、千載一遇の恵みではないのでしょうか。

明主様は、「嬉しさの湧く喜びを知りにけり神に額ぬかずく事を知りてゆ」、また、「神の愛心の底より知りてより寂しさ知らぬ吾となりける」というお歌をお詠みになりました。

こうしたお歌を通して、明主様は、ご自身が額ぬかずづくべき方である主神をお知りになり、そして、ご自身を愛しておられる主神をお知りになって以来、ご自身の中に嬉しさと喜びが生まれ、寂しい気持ちが消えてしまったご心境を吐露なさったのではないのでしょうか。

私どもは、もはやひとりぼっちではありません。

私どもは、いつ、どこにいても、主神に対し呼びかけることができ、委ねさせていただき、交流させていただくことができるのです。

それは、主神が常に私どもの中におられるからではないのでしょうか。

私どもの魂の親である主神は、私どもの中心に存在しております。

その主神に対し、“あなたの名を呼び、あなたと思いを通わせることを赦してくださいましたのですね。ありがとうございます、と、このような思いを少しでも持つことができたとしたら、それは、主神の限りなく大きな愛であり、恵みではないのでしょうか。

こうしたことを思うにつけ、明主様がお詠みになった

「大空の広きを仰ぎて憶おもふかな限りも知らぬ大御心を」というお歌が、私の心の中に浮かんでまいります。

本日は、春季大祭に併せて、大自然の恵みに感謝いたしつつ、豊穰祈願のみまつりが執り行われました。

明主様が「大自然」と仰せになった万物は、ことごとく、私ども人間が主神の子として新しく生まれることができるよう、一生懸命お働きくださっております。

私どもは、そうした万物と一体であることを胸に刻みつつ、万物と共に、主神の良き実りとして天国に立ち返らせていただき、共に主神にお仕えするものとならせていただきたいと思います。

終わりに、夜昼転換を成し遂げられた主神の新しい息が私どもの中に宿り、春の息吹のようにすべてをいきいきと甦らせてくださいましたことを、明主様と共にあるメシアの御名にあって、主神に心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

以 上